

## 第5回“地域産業の展開にむけて”研修会（新潟・上越）開催報告 －伝統と技術の融合－ 『地域経済との連携』に着目して

この研修会は各県に共通する「地域産業の展開－伝統と技術の融合－」をテーマとし、各県の地域産業の新たな展開を学び、それを活かした地方創生のあり方などを議論するために、第5回の研修会では新潟県上越地域の企業のイノベーションに関する取り組みに着目して研鑽を行いました。

### ■ 見学会

- ① 明星セメント(株) 糸魚川工場 新潟県糸魚川市上刈七丁目1番1号
- ② (株)有沢製作所 ARISAWA Innovation Center 新潟県上越市大字中田原1番地

### ■ 企業研鑽会 (株)有沢製作所 ARISAWA Innovation Center

- ① 明星セメント(株) 明星セメントのサスナビリティ(持続可能性)への取り組み  
取締役 糸魚川工場長 伊関 一男 様
- ② (株)有沢製作所 企業戦略 及び 地域連携  
常務執行役員 イノベーション推進本部 副本部長 藤田 秀一 様
- ③ 上越地区の地域経済について・研修会の講評  
金沢大学 融合研究域融合科学系教授 佐無田 光 様



明星セメント(株)糸魚川工場



(株)有沢製作所 Innovation Center

## &lt;見学会①&gt; 明星セメント(株) 糸魚川工場

- 前身の創業1956年、設立は1958年で、70有余年の歴史があるセメント製造メーカー。
- 採掘から出荷まで完結するセメント生産システムを有した地域密着型の工場であり、原料・燃料の受入とセメント製品出荷が連続的に且つ、同時に可能な生産体制を構築している。
- 工場近傍の黒姫山などで自社開発をした鉱山より良質な石灰石、珪石を採掘し、鉱山と工場を全長6.0 kmのコンベアで直結。完成品の出荷のため、近接する姫川港とも1.1kmの地下埋設ベルトコンベアで直結されている。
- セメント製造工程は、焼成前に原材料を温める高さ80mのプレヒーターとセメント焼成のための直結5-6m×長さ約100mのセメントキルン（焼成窯）を有し、原材料を1450℃の高温で焼成。
- 中間製品であるクリンカを製造し、冷却後粉碎をし、石膏を加えてセメントを製造している。
- 環境配慮型エネルギーの活用と推進しており、サーキュラーエコノミーを実現している。工場内にバイオマス火力発電所などを有する。

## &lt;見学会②&gt; (株)有沢製作所 ARISAWA Innovation Center

- 創業1909年、株式会社として改組・設立は1949年と長い歴史を有する製造メーカー。
- 「電子材料」「産業用構造材料」「ディスプレイ材料」の3つの事業分野における各種材料の製造販売を展開している。
- 創業時から培ってきた「織る」、「塗る」、「形づくる」技術を新しい要素技術と新素材を結びつけることにより、付加価値の高い製品づくりをめざし、技術革新を連綿と実現してきている。
- オープンイノベーションに向けた取り組みや、「リブランディングプロジェクト」を開始。2025年には「イノベーションセンター」が完成している。
- イノベーションセンター内部、外部も見学。ハスの葉・幹・根の機能を取り入れた設計、雁木町屋の自然光や風の活用、また、これまで捨てられていた工場排熱の活用など、最大限環境に配慮した建設コンセプトの紹介をうけた。

＜研鑽会＞ (株)有沢製作所 ARISAWA Innovation Center

1. 挨拶 日本技術士会 平野 吉彦 北陸本部長
2. 研鑽会 コーディネーター 山本 尚三 地域産業の展開研究グループ委員長

事例報告① 明星セメント(株) 明星セメントのサステナビリティ(持続可能性)への取り組み  
取締役 糸魚川工場長 伊関 一男 様

- 明星セメント(株)が取り組むサステナビリティ活動について、主に「サーキュラーエコノミー（循環経済）」の推進と「カーボンニュートラル実現」への取り組みを軸に、同社の強みや課題、今後の展望が示された。
- 上述の①一貫した生産システム、②豊富な自社開発資源、③環境配慮型エネルギー活用に加え、④災害廃棄物の受入体制により「サーキュラーエコノミーへの取り組み」についての説明があった。
- セメント原料に必要な成分を持つ廃棄物を有効利用し、高温焼成により二次廃棄物を発生させない仕組みを構築し、全国の災害廃棄物受入実績は25万トンを超え、地域復興に寄与しているとのこと。
- 祖業のセメント製造を、循環型社会と環境負荷低減の実現に向けての社会的役割へ昇華させていることは技術応用の観点から大変参考になった。



平野本部長  
開会の挨拶



山本委員長  
研鑽会趣旨説明



明星セメント(株)  
伊関取締役  
事例報告

## ＜研鑽会＞ (株)有沢製作所 ARISAWA Innovation Center

## 事例報告② (株)有沢製作所 企業戦略 及び 地域連携

常務執行役員 イノベーション推進本部 副本部長 藤田 秀一 様

- 「織る」、「塗る」、「形づくり」技術の組み合わせで実現できる技術成長により、付加価値の高い製品づくりを、現在は、「情報デバイス」、「次世代モビリティ」、「次世代エネルギー」、「スマートウェルネス」への進出を目指しているとお話があった。
- 企業リブランディングと働き方改革に対する取り組みが紹介され、その一環として、イノベーションセンターを拠点として、①オープンイノベーションの促進、②多様な視点とアイデアの融合、③リソースの効率的な利用、④ 新技術の開発と応用・技術力のアップ・人材育成、⑤従業員の交流の活性化を目指していると説明があった。あわせて、技術立脚型企业であり続けるため、わくわくして働き、イノベーションを創出していく社員になるため、ワークショップが多く開催され、自分事化、エンゲージメント向上につながっていると説明があった。
- イノベーション・環境配慮・DX化の各要素も加味し、企業価値向上を図っていることが理解できた。技術開発力と組織変革力を兼ね備えた企業に向う取り組みは大変参考になった。



(株)有沢製作所  
藤田常務執行役員  
事例報告



研鑽会の状況①



研鑽会の状況②

<研鑽会> (株)有沢製作所 ARISAWA Innovation Center

上越地区の地域経済について・研修会の講評

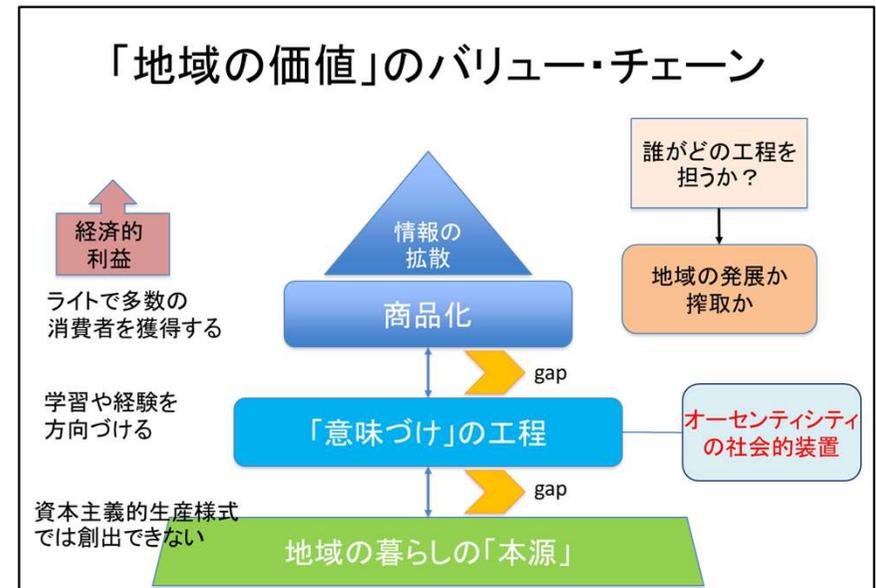
金沢大学 融合研究域融合科学系教授 佐無田 光 様



佐無田 教授

- 新潟県と上越地域の産業構造分析が冒頭あり、「地域の価値」をいかに形成・持続させるための「地域の価値」のバリュー・チェーンについての提言があった。
- 企業にとっての「地域」の意味は、伝統的には立地条件：土地・労働力・インフラなど生産要素への アクセスや市場への距離、集積の利益を意味し、基本的には「費用」に換算可能な経済的要素のみを評価であった。
- 現在は地域の固有性・歴史性、人々のつながり、自然や文化との不可分性、愛着・共感など、非経済的要素こそが人々に求められる要素であり、資源となるという視点にたったとき、地域にとって人や資本を呼び込むチャンスになり得るとのこと。

- 特に、
  - 地域の人々が守り伝えたいと願ってきた「根っこ」としての文化や風景。それが新しものと組み合わせられることで、他にはないオリジナルで魅力的なストーリーとなる。
  - 地域の暮らしの「根源」と「商品化」との間にある「意味づけ」を担う工程を安易に（地域から）外部に委ねるならば、利益が地域に還流されないだけでなく、地域資源は陳腐化する恐れもある。



- この内容は「地域産業の展開－伝統と技術の融合－」をテーマとする本会にとって大きな示唆である。